

仙台新港のサーフスポットにおけるサーファーの海岸利用動向と波浪に関する現地調査

1014204 有川 直柔

1. はじめに

海岸法は、昭和 31 年に制定されて以来、大きな改正は行なわれていなかったが、時代の要請に対応した海岸管理を行なうために、新海岸法が平成 11 年に抜本的に改正された。新海岸法の一番の改正点は、従来の防護だけの目的に「環境」及び「利用」を追加したことである。海を利用した身近なスポーツの代表的なものの一つとしてサーフィンが挙げられる。しかし、サーフィンに関する調査研究例は少ない。仙台市内に通称仙台新港といわれる国内有数のサーフスポットがある。

そこで、当研究室では、平成 16 年より海岸利用の観点からサーフスポットにおいて、サーファーの動向と波浪に関する調査^{1~2)}を行っており、本年度も同調査を行ったので、その結果を報告する。

2. 調査方法

図-1, 2 にサーフスポットの位置と概略図を示す。仙台新港の南防波堤の南側で蒲生干潟の北東側に位置している。調査海岸長は約 500m である。調査日は、平成 26 年 8 月 17 日(日)、18 日(月)、19 日(火)、20 日(水)、21 日(木)、22 日(金)、23 日(土)の全曜日を含んだ 7 日間である。調査項目は、サーファーの人数、気象条件、波浪条件である。調査人数は海に入ってサーフィンをしている人、ボードを持って砂浜を歩いている人を対象とした。調査時間は午前 5 時から午後 5 時まで毎整数時前後 20 分間の 1 日計 13 回測定した。なお、碎波継続時間、碎波形式はビデオ映像を基に 1 回当たり 12 波より測定した。

3. 調査結果及び考察

(1) 曜日及び時間毎のサーファーの人数

図-3 は、横軸に時間帯、縦軸に人数を表し、平成 26 年 8 月 17 日(日)、18 日(月)、19 日(火)、20 日(水)、21 日(木)、22 日(金)、23 日(土)の調査日・曜日をパラメータとして図示したものである。図-3 より、最も利用人数の多い曜日、時間帯は日曜日の 7:50~8:10 の 117 人である。また、8:50~9:10 の時間帯を除く 6:50~11:10 まで、100 人以上のサーファーが確認できる。次は、土曜日の 10:50~11:10 の

88 人で、日曜日に続き、6:50~12:10 まで約 70 人以上のサーファーが確認できた。月曜日の 9:50~11:10 の時間帯も 88 人のサーファーが認められる。平日は全体的に各曜日とも測定開始の 4:50~5:10 からサーファーが増え始め、9:50~10:10 をピークに徐々に減る傾向がある。各時間帯・曜日とも日曜日の利用者が多いのは前報に続き今回も同じであった。このことから、やはりサーフィンをしている人は社会人が圧倒的に多い為³⁾、一般的な休みである土曜日と日曜日に集中することが推測できる。



図-1 サーフスポット位置図



図-2 仙台新港のサーフスポットの概略図

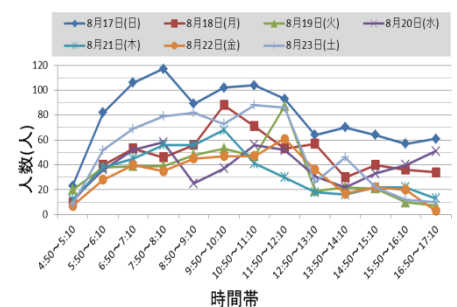


図-3 調査日のサーファーの人数変化

キーワード: 仙台新港、海岸利用、サーフスポット、サーファー、波浪、現地調査

No. 2-4 (高橋研究室)

(2) 砕波波高

図-4 は、調査日の平均砕波波高と時間帯の関係を示したもので、曜日パラメータとして図示したものである。曜日、時間帯毎に砕波波高は大きく変動しているが、日曜日は他の曜日に比べ砕波波高が全体的に低く、水曜日が全体的に高い値を示している。これまで、砕波波高とサーファー人数には相関性が認められず、曜日に依存する傾向が認められていた³⁾。今回も曜日に依存する傾向であり、比較的砕波波高が低い日曜日のサーファーの人数は全測定日の中でも一番多い人数となっている。一方、全体的に波高が高い水曜日のサーファー人数は、図-3 より比較的少ない結果となっている。

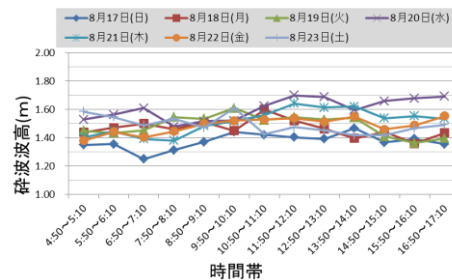


図-4 調査日の砕波波高変化

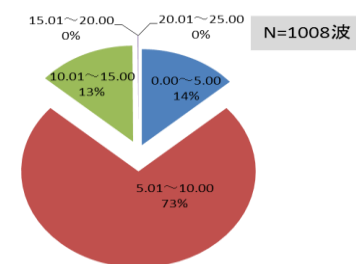


図-5 調査日の全砕波継続時間割合

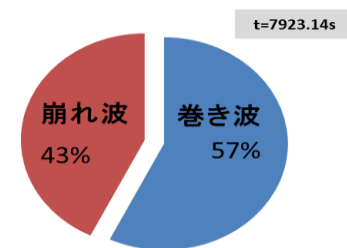


図-6 調査日全砕波形式割合

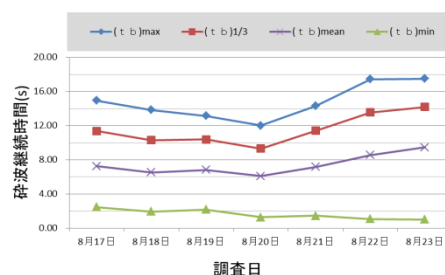


図-7 全砕波継続時間変化

(3) 砕波継続時間及び砕波形式

サーフィンを行う際に、波浪として大きく影響を与えると思われる砕波継続時間と砕波形式について述べる。図-5 は、調査期間中の砕波波数 N = 1008 波 (8/17(月)の 7 回分欠測)の砕波継続時間 (tb) を 5 (s) 毎に区別してその割合を示したものである。最も多い砕波継続時間の割合は 5.01~10.00 (s) で 73%、次に 0.00~5.00 (s) で 14% と 10.01~15.00 (s) の 13% で、15.01 (s) 以上は 0% という結果になった。

図-6 は、調査期間中の 1 回の計測波数 12 波を、1 日 13 計測の 7 日間分 (8/17(月)の 7 回分欠測)で、砕波継続時間の合計 7923.14 (s) を砕波形式別に示したものである。ただし、1 回の波でも途中から砕波形態によって砕波継続時間を区別した。図-6 より、巻き波が 57%、崩れ波が 43% と、今回の砕波継続時間は巻き波が多かったことが分かる。なお、日によって砕波形式の割合に差はあるものの、調査期間中の各曜日の巻き波の割合は 43~72%、崩れ波は 28~57% の割合であった。不規則波の代表波高としては、Hmax、H1/3、Hmean 等で表わす。そこで、砕波継続時間も同様の方法で表示した。図-7 は、調査日の時間帯毎の代表砕波継続時間を示した。(tb)1/3 及び (tb)mean はそれぞれ 9.33~14.20 (s) 及び 6.09~9.46 (s) の間であり、比較的安定している代表砕波継続時間となっている。

4. おわりに

サーファーの人数は例年通り、曜日に依存しており土、日曜日が多かった。全曜日共、午前中の方が午後よりサーファーの人数は多くなっている。特に、午前中の 6:50~12:10 の間に曜日によってピークが 1 つまたは 2 つ認められる。砕波波高は、約 1.2~1.7 (m) であるが、サーファーの人数との相関性は認められない。砕波波高、砕波継続時間、砕波形式、についても仙台新港の数値として示すことができた。

<参考文献>

- 1) 千葉透雄・渡部一徳・高橋敏彦: 仙台新港近郊のサーファーの動向調査, 16 年度土木学会東北支部, pp.350-351, 2006
- 2) 小嶋博明・高橋敏彦・新井信一: 仙台新港におけるサーファーの利用動向及び海岸利用に関する調査, 土木学会論文集 B3(海洋開発), pp.1215-1220, 2012
- 3) 千葉透雄・高橋敏彦・新井信一: 仙台近郊の海岸におけるサーファーの利用動向及び海岸環境に関する意識調査, 海洋開発論文集, vol.22, pp.169-174, 2006